

東京都スクールカウンセラー（臨床心理士）

金屋光彦

いじめ考 その3

一怖いのは、正義に乗ったいじめ一

1 正義の味方とは

いじめは、力のアンバランスで生じる関係の病である。強い者や大多数の者が、少数や弱い立場の者に対して、苦痛を与え続ける行為といえる。一方、正義の味方であるヒーローは、正しく生きる弱い者を助ける、あるいは、おのれの利益のため弱いものを食い物にする悪い強者をやっつけるというのが、おきまりの構図だった。

ところが、正義の行いと信じ切っている行為の中に、実態はいじめになっている恐ろしい現象が、現実の人間社会ではよく起こるのである。

2 最近の事件から

2014年2月、広島県立高校1年の男子生徒がいじめを苦に自殺した。彼は野球部員だった。

入学当初からけがや病気で練習を休むことがあり、それをとがめられていた。

「なぜ休むのか、本当の理由は何か？」と問いただす他の部員の態度に、彼は心を痛めていた。

この高校は2011年に、甲子園に出場したくらい有望な野球部である。

練習を休むこと、それは通常の社会的価値判断からいえば、いいことではないだろう。大概のスポーツ部で奨励されることは、練習の熱心さであり、雨の日も風の日も、少々体調不良のときでも、休まず練習に参加することが尊ばれる。

その規範にのっとり、彼になぜ休むのか、と執拗に迫る他の部員たちは、無意識に多少の正義感にもかられていたはずである。監督やコーチもそのような態度を示せば、それらの行為は次第にエスカレートしていく。

「なぜ休むのか、大事な練習を！ 甲子園にみんなと行きたくないのか、休めばそれだけみんなから遅れるぞ。関係プレーやサインプレーも覚えられんぞ……」等、練習を休む非を、さまざまな正義の思いを錯綜させながら、彼に迫っていったことは想像に難しくない。

こういった望まれる規範を前面に出し、「みんなが迷惑している」として、本人をいじめ抜く現象は、珍しいことでない。特に、この野球部が、練習を休むことを厳しく戒めるような風土が強ければ、なおさらである。

この構造が恐いのは、責められている側が、練習を休んだという良くない行為を犯したという負い目があり、それに反論できず、言われればなしになりがちなところである。

3 批判叱責でなく、支え合う風土こそ重要

練習を休んだことを、責めるばかりではなく、そのことをカバーし合うような雰囲気や風土があれば、その後の展開は違っていたであろう。

「昨日やった関係プレーを、始まる前に少し復習しよう。昨日休んだAには特に、みんなで教えてやってくれ」等と、監督やキャプテンが指示してやり、みんなで教え合い支え合うことがあったなら、良き正義の集団として、機能していったはずである。

彼も野球が好きで野球がやりたくて入部してきた大事な部員である。練習にも出て、みんなと一緒にプレーしたい、うまくなりたい、みんなにも迷惑かけたくない、思っていたであろう。病気やけがで練習に出られない者は、弱者なのである。

4 規範やルールにのっとったいじめは日常茶飯事

その後、彼に対する態度は、練習を休むことを責めるばかりですまなくなっていく。

うその集合場所をLINEで伝えられたり、練習を休んだ翌日に、彼のロッカーが荒らされ教科書がなくなっていたりしたこともあったという。やらかした部員たちは、これらの行為をひどい苦痛を与えるいじめなどとは思わず、逆に、大事な練習を休む患者部員に対して、正義のお仕置きをしているくらいの感覚だったのかもしれない。

そうして、彼は2月になったある日、野球部をやめた気持ち吐露し、自殺を遂げるのである。

自殺には必ず強い孤立感があるというが、彼もその思いは強かったに違いない。

いじめの加害者が、その行為を正当化しやすいのが、この規範やルールといったものから生じるいじめである。

「給食を一つも残さず食べる」というクラス目標の下、どうしても食べられない食物の前で、みんなの白い批判の目にさらされながら、立ち尽くす子どもたち。その圧力に屈し、無理に食べ、発熱して倒れた児童が私である。給食を全部食べて残さないにこしたことはないが、望ましい規範や目標は、行き過ぎれば毒になり、いじめにもつながる。

いじめる加害側は、望ましい正義の側に立っているので、その攻撃は容赦のないものになりがちだ。ここが、正義に乗ったいじめの恐ろしいところである。